

● 井上さんの書籍紹介

「余命18日をどう生きるか」
田村恵子著 朝日新聞出版 2010年11月初版



はじめに

本書は、大阪にある「淀川キリスト教病院」のホスピス病棟で、がん看護専門看護師として働いておられる田村恵子さんが、約20年の経験に基づいて上梓された。

ホスピスとは、治癒の見込みのない末期がんの患者さんの生を支えるために、専門的なケアをする施設である。淀川キリスト教病院ホスピス病棟の平均入院日数は18日。ここでは延命を第一の目的とはせず、人間としての尊厳を保って生をまっとうするための援助が行われている。

他方、「緩和ケア病棟」とも呼ばれることが多くなった。本書でも指摘されているように、「緩和ケア」では、痛み等の症状を緩和することが強調され、「死」は隠蔽されているのかもしれない。だが、患者さんには、「死を正面から見つめ、どのように生きるか、どのような生き方を選ぶか」が問われる。

ホスピスとはいかなるところか、多くの方は知りたいが、その機会はほとんどない。著者の経験、思いより、「余命18日をどう生きるか」に対するヒントを本書は与えてくれる。この点で非常にためになった一冊であったため、紹介する。

著者の紹介

1957年生まれ。1987年から淀川キリスト教病院に勤務。現在、ホスピス主任看護課長。がん患者を最後まで看取り、家族への看護にも取り組む姿がNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」で2008年に放映され、反響を呼んだ。

1996年に「専門看護師制度」が制定され、翌年、1997年に「がん看護専門看護師」の資格を取得されている。

本書の内容・感想

ホスピスの医療においては、一般的に死に焦点を合わせているように思われているが、実は、生を支えるケアを行っている。この点が、ホスピスの中と外で認識がもっとも異なるところだと本書は指摘する。具体的な例として抄出する。

『次のような患者さんもいらっしゃいました。お話の途中で「ホスピスにきて楽になったけれど、何かを待っているだけなんだよね」と涙ぐまれたんです。待つものは死だと話されるのです。そういうときに何と答えたら良いかなってマニュアルはありませんよね。「いろいろな人を見ますけれどわたしはそうは思いませんよ。ここにこられるかたがたは死を待っているのではなくて、それぞれ今を一生懸命に生きていらっしゃるように思います。」という意味のことをお伝えしました。』

また、「まわりに迷惑をかけるぐらいなら早く死にたい」という言葉もよく耳にする。田村さんは言う。

『体が動かなくなるということは、自尊心がとても傷つけられることですよね。わたしも同じ人ですから、その心情はすごく理解できます。無理に価値観を変容させる必要はないのですけれど

も、問題は「体が弱っていくことも含めて人生なのである」と思えるかどうかではないでしょうか?』

1週間前からはケアの中心軸は徐々にご家族に移行する。

『死の1週間前からは、ご家族にもできることをすこしずつ手伝っていただくようにしています。体を拭くなんて、そのこと自体は最後までナースでもできる作業です。でも、そこで手伝っていただくことによって、ご家族に「自分も死を見送るためのケアができた」と思えるようになっていただきたいのです。』

亡くなっていくかたに「自分は家族に大切にされている」という感覚を持ってもらうこともホスピスの重要な側面でもあります。』

田村恵子さんの死生感も参考になる。

『よほど歴史に名を残すような人物でもない限りは、人間というのは親しい人の心のなかに残るということですか、死後、生きた痕跡を残していけないのではないのでしょうか。わたしが生きていたことについて、100年経ったあとに誰が覚えているかと言ったら、誰も覚えていない。でもわたしの親しい人は、わたしが亡くなったことを受けてわたしとの関係で育んだものを抱えながら別の人とも接していく。これが、小規模ではあってもわたしという人間が死んでもつながっていく大切な気持ちなのかなと個人的に思っている。』

淀川キリスト教病院は、キリスト教徒の病院ではなく、宣教師が日本にきて、日本のなかでも医療の貧しいところに病院を作りましょうという意図でできた、一般市民のための病院である。このことも付け加えておきたい。

最後に。この本の中で私が一番好きな言葉。

『生きた結果にあるものが「死」。死があるからこそ今が輝く。』

私も、理不尽な死であっても、「死に向き合い、今を生き、最後の時間(とき)まで生き抜き生き切ることが大切」と思うようになった。

生について死について考えるためには、時間も必要であると思います。本書を通して、考えていただければ幸いです。

会員 井上 林太郎